

ま え が き

本書は、平成8年度国際日本文化研究センター共同研究『日本人と英語：英語化する日本の学際的研究』の研究報告書である。

日本でも海外でも、英語は益々広がりを見せ、それはだれにも止められないように見える。私たちの生活には英語があふれ、それは単に言語的な側面にとどまらず、私たちの文化、感覚、行動、コミュニケーション、人間関係にも影響を及ぼしている。

そこで、英語は一体私たちにどのような影響を与えているのかを考察するのが本共同研究の目的である。今まで、言語学では、英語の地球的広がりによる影響を検討する研究は皆無と行ってよかったが、本研究では、諸分野の研究者に結集してもらい、一年間に渡って、この問題について検証し、議論を交わした。この報告書はその成果である。

まえがきとして、次の4項目について以下に説明する。

1. 共同研究開始までの経過
2. 共同研究会の実施
3. 共同研究の意義
4. 報告書の概要

1. 共同研究開始までの経過

(1) 共同研究への応募

平成8年度の共同研究の公募は、平成6年度中に行われ、私が研究計画書を作成し、応募した。その結果、平成7年3月には採用が決定された。

(2) 研究計画書

以下のような内容で、計画書を作成した。(一部省略)

- a. 研究課題：日本人と英語：英語化する日本の学際的研究
- b. 研究目的

本研究の目的は、今日の日本人の言語・コミュニケーション行動及び日常生活における「日本人と英語の関わり」の実態を把握し、まず、日本人の言語・コミュニケーションがどれ程英語化しているかを明確にし、それが日本人の自画像やアイデンティティにどのような影響を与えているのかを解明することにある。同時に日本人が欧米・英語に対してどのような認識と価値観を抱いているのかも明らかにする。

研究内容は、(1)日本人の言語・コミュニケーション行動の英語化、(2)日本の大衆文化としての「英会話」、から成り、(1)では、日常会話、マスメディア、組織(企業、官公庁)等

のコミュニケーションの英語化の実態を把握しその影響を考察する。(2)では、「英語化」の役割と位置、英語コンプレックス、国際化・留学ブームと英会話の関係などについて考察する。

これを基に日本における英語教育と異文化交流のあり方について提言を行なう。

c. 研究組織

研究代表者 津田幸男 名古屋大学教授 国際コミュニケーション
幹事 柏岡富英 国際日本文化研究センター助教授 社会学
センター教官 森岡正博 国際日本文化研究センター研究員 総合研究
共同研究員

石井 敏	独協大学教授	コミュニケーション論
伊藤陽一	慶応大学教授	国際コミュニケーション論
楠瀬佳子	京都精華大学教授	アフリカ文学
高橋順一	桜美林大学教授	文化人類学
田中優子	法政大学教授	日本近世文化
遠山 淳	桃山学院大学教授	コミュニケーション論
中島義道	電気通信大学教授	哲学
藤原雅憲	名古屋大学助教授	日本語教育学
カール・ベッカー	京都大学助教授	比較思想史
吉野耕作	東京大学助教授	社会学
早稲田みか	大阪外語大学助教授	社会言語学

d. 共同研究会の開催：6回開催する（奇数月開催）

(3) 連絡網の作成

平成7年度は、準備期間として設定され、共同研究者間の連絡網を作成し、平成8年度からの共同研究への態勢を整えた。

(4) 準備会議の開催

a. 第1回準備会議（平成8年2月、東京）

東京都内及び近郊在住の研究員による準備会議。自己紹介及び各研究員の追究したいテーマについて情報交換を行なう。

出席者：高橋順一、田中優子、中島義道、吉野耕作、津田幸男

b. 第2回準備会議（平成8年3月、京都）

5月からの開始を目前にして、共同研究の細目に関して2日間にわたって討議した。討議内容は、準備状況の報告、研究計画全体の検討、年間計画の細目決定、ゲスト・スピーカー候補者選定、その他である。

出席者：伊藤陽一、楠瀬佳子、高橋順一、中島義道、森岡正博、津田幸男

この準備会議の最大の成果は、各研究会に特定のテーマを設定するという方法を決定したことである。

すなわち、第1回研究会は「総論」、そして最終の第6回は「未定、及び総括」とした以

外は、第2回から5回まで次のようにテーマを設定した。

第2回（7月） テーマ「国家・民族・言語」

第3回（9月） テーマ「英語教育をどうするか？」

第4回（11月） テーマ「翻訳における英語の影響」

第5回（1月） テーマ「国際語としての日本語」

これらのテーマを基に、発表者、ゲスト・スピーカーの選定を行なった。

このように、共同研究への応募から約1年半の時間をかけて、本共同研究のさまざまな準備を行ない、共同研究の円滑な開始と運営を図った。

2. 共同研究会の実施

(1) 共同研究会における研究発表

第1回（5月10、11日）

1. 代表者挨拶、自己紹介、年間計画の説明等
2. ゲスト・スピーカー講演
中村 敬（成城大学教授）『英語化現象の研究～領域と方法』
3. ゲスト・スピーカー講演
大石俊一（広島大学名誉教授・安田女子大学教授）
『反「英語支配」への視点～文学的ラディカリズムの立場で～』
4. 津田幸男 『言語と人権～映画「英語がなんだ!」を通して』

第2回（7月5、6日）

1. 高橋順一 『北米インディアンの英語化に関する一つの事例』
2. 早稲田みか 『ハンガリーの国家・民族・言語』
3. 楠瀬佳子 『南アフリカにおける言語政策～英語と民族語との関係』
4. 吉野耕作 『英語と文化ナショナリズム』

第3回（9月13、14日）

1. ゲスト・スピーカー講演
森住 衛（大阪大学教授）
『英語教育における言語観の検証～英語の中にあられる日本人の表記法を中心に』
2. 津田幸男 『英語支配と英語教育～言語的主体性を求めて』
3. 岡戸浩子（名古屋大学大学院生）
『日本における英語教育～外国語教育の多様化の視座から考える』
4. ゲスト・スピーカー講演
石原昌英（琉球大学助教授）『英語教員免許と英語支配』

第4回（11月8、9日）

1. 田中優子 『日本文化を表現する言葉の英訳について』

2. 中島義道 『人文科学（哲学）における英語（欧米語）支配』
3. 伊藤陽一 『「英語支配」の統計的評価』
4. カール・ベッカー 『20世紀日本語の英語化』

第5回（1月10、11日）

1. ゲスト・スピーカー講演
阿部 一（独協大学教授）『日本語における外来語』
2. ゲスト・スピーカー講演
真鍋一史（関西学院大学教授）『日本語の国際化を考える指標』
3. 遠山 淳 『日本のコミュニケーションをめぐって』
4. 藤原雅憲 『日本語不信論の歩み～明治期から現代へ』

第6回（3月14、15日）

1. 高橋順一 『国際組織と英語支配』
2. 前田尚子（名古屋大学大学院生）
『「母なるもの」について～日本人は欧米文化とどう闘ってきたか』
3. 井上治子 『文化多元主義とアイデンティティ』
4. 石井 敏 『日本人と英語の今後の関係』
5. 総括討論 『日本人と英語：その実態、影響、そして提言』

(2) 共同研究員の追加

以下のメンバーが共同研究開始後に加わった。

井上治子（名古屋文理短大助手）、石原昌英（琉球大学助教授）、森住 衛（大阪大学教授）、前田尚子（名古屋大学大学院生）、岡戸浩子（名古屋大学大学院生）

(3) オブザーバー

滝沢岩雄（毎日新聞論説委員）、黒田耕太郎（毎日新聞学芸部）、刀祢館正明（朝日新聞学芸部）、馬場秀司（朝日新聞学芸部）、武田優子（桐原書店）、木田賀夫（洋販出版）、西岡暉純（アルク日本語事業部）

(4) 共同研究への反響

共同研究が始まった5月に、毎日新聞の「余録」欄に、本共同研究のことが紹介された。小学校への英会話教育導入など英語隆盛の時代に、それに抵抗する力として本共同研究が紹介された。

3. 共同研究「日本人と英語」の意義

この共同研究の意義として、次の3つが掲げられる。

(1) 新たな研究テーマの開拓

従来、英語に関しては、英語学という分野があり、それが英語の研究を行ってきた。しかし、それらの研究は、英語の語彙、音声、構造、意味等を解体分析するもので、いわばことばを切り刻む学問であり、人間との関わりを解明するものではなかった。つまり、没社会的で批判精

神の欠如した英語学、言語学が圧倒的であった。

さらに、日本の英語学一つ取ってみても、欧米の英語学のテーマや理論、方法をそのまま取り入れているに過ぎず、自分達の視点、観点、感性からの学問にはなっていないのが現状である。つまり、欧米追随型の主体性のない英語学、言語学を日本の学者たちは実践してきたのである。

こういう実態を踏まえると、本共同研究は、「日本人と英語の関わり」をテーマしていることから明らかなように、没社会的で欧米追従的な英語学、言語学を越えて英語と日本人の関係、影響を解明するものであり、その問題意識は、英語に囲まれ暮らし、生活が「英語化」している自分達の実感をもとにしたものである。

このような主体性と問題意識を基に、本共同研究は言語学において新たな研究テーマを開拓するものであり、それは同時に新たな言語学を追求する行為でもある。

(2) 学際的な研究組織

上の「研究組織」でも記したように、本共同研究の体制は、人文科学領域の諸分野の専門家に集まってもらい構成している。これらの分野は、コミュニケーション論、国際コミュニケーション論、社会学、哲学、英語教育、社会言語学、文化人類学等と多岐にわたっている。「英語化」「日本人と英語の関わり」といったテーマに対して、言語学的な面に偏らずに、それぞれの研究者の専門の視点と英語への問題意識を基に研究を進めてもらい、各研究会での発表へとつなげてもらった。

私はすでに『英語支配への異論～異文化コミュニケーションと言語問題』（第三書館、1993年）という本を編み、文学、哲学、英語学、国際コミュニケーション等の専門家6人で、「英語支配」に多角的に取り組んだ。この共同研究は、いわばこの延長線上にあるものといえる。

「英語支配」「英語化」「日本人と英語の関わり」は今までの言語学の枠組みではとらえきれない新たな課題であるがゆえに、このような学際的な方法が必要なのである。

(3) 社会的課題への取組み

学問研究の目的は「知」つまり新しい知見の生産であるが、その「知」は必然的に批判的になる。本共同研究は、「英語化」「英語支配」への批判的問題意識が基底にあり行われたと私は信じている。

1990年代に入って、いわゆる「英語帝国主義論」が盛んになっており、それをもはや無視することはできない。外国語教育における英語への一極集中、国際語として他の言語を圧倒する英語、国際語としての英語に迎合する「英語病」、世界の言語、文化、価値、コミュニケーションを画一化する暴力・権力としての英語等、急激に権威化、権力化している英語の実態を把握し、批判的知見を提示しているのが「英語帝国主義論」（あるいは正確には「反・英語帝国主義論」といったほうがよいかもしれない）である。

この「英語帝国主義論」は、権力・暴力としての英語に対する異議申し立ての言論運動といえる。本共同研究も、その精神においてこの「英語帝国主義論」の精神を受け継いでおり、日本及び世界における「英語化」、「英語支配」を人類にとっての大きな課題としてとらえ、それに対する新たな知見を提出しようというものである。

4. 本報告書の概要

本報告書は、内容別に5部に別れ、計14編の論文で構成されている。

第I部は、「日本人と英語：理論・方法・展望」とし、「英語化」「英語支配」等の問題への総論的な論考を集めた。

第II部は、「英語教育と英語支配」と題して、3つの論文より成る。英語支配が英語教育へ与える影響のほか、英語教員養成の改革、言語教育政策への提言などが論じられている。

第III部は、「国際語としての英語の影響」と題して、統計を基にした研究と哲学分野における英語支配の実態を論じた研究から成る。

第IV部は、「英語の日本語への影響」と題して、日本語の英語化の実態、日本語不信論、そして、日本型コミュニケーションに関する論文から成る。

第V部は、「言語・アイデンティティ・ナショナリズム」と題し、ハンガリーとアメリカン・インディアンにとっての言語とアイデンティティの関係を考察している。

この報告書が、日本の英語教育のみならず、英語学、言語学に貢献すること、そして、より平等で公正な国際コミュニケーションの確立に寄与することを願っています。

研究代表者 津田幸男